

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25240053

研究課題名(和文) 歴史写真に基づく1860～1930年代の日独関係史の再構築

研究課題名(英文) Reorganization of a history of relation between Japan and Germany based on historical photos in 1860s- 1930s

研究代表者

馬場 章 (Baba, Akira)

東京大学・大学院情報学環・教授

研究者番号：10208704

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 34,800,000円

研究成果の概要(和文)：本課題では、明治維新时期から日独防共協定締結期、すなわち、1860年代から1930年代を対象に、日独交流の歴史を3期に分けて、日独関係史の再構築を行った。従来の日独交流史研究は、主として両国の政治家や学者の文献資料を基に描かれて来た。それに対して、本課題では、ドイツと日本の両国において歴史写真をはじめとするメディア資料と関連文献資料の調査・収集・分析を行い、日本とドイツ両国の国民の視点を重視した。ドイツにおける調査では、とくに、トラウト・アーカイブ(ボン大学所蔵)、グラウ・アーカイブ(ヘルムート・グラウ氏所蔵)に重点を置おいて、写真資料・映像資料と関連する文献資料の調査を行った。

研究成果の概要(英文)：Under this research theme we shared a history of an exchange between Japan and Germany (included in Prussia) with 3 periods and reorganized a history of relation of two countries, targeted from a Meiji restoration (Meiji-isin) period to the Japan-Germany Anti-Comintern Pact (Nichi-doku bokyō kyotei) conclusion period, or from 1860s to 1860s. A conventional history study of the exchange between Japan and Germany was mainly drawn based on document materials of politicians and scholars. On the other hand we investigated, collected and analyzed historical photo materials such as materials of media and relevant document materials in Germany and Japan, and emphasized the angle of citizens of both countries under the research theme. In Germany we investigated especially the archive of Trautz (possessed by the University of Bonn) and the archive of the Grau family (possessed by Mr. Helmut Grau) and collected historical photo, picture materials and related document materials in them.

研究分野：歴史学

キーワード：歴史写真 アーカイブ デジタルアーカイブ 日独関係史 トラウト・アーカイブ グラウ・アーカイブ

1. 研究開始当初の背景

(1)平成25年(2013年)は、日独修好150周年を迎え、日独関係史研究が盛んになることが予想された。従来の研究は、わが国とドイツ(プロイセン時代を含む)の代表的な政治家あるいは学者レベルにおける政治・経済的な関係の解明に重点が置かれてきた。それは、明治維新期のわが国の政治、経済、あるいは学術の分野において、ドイツから与えられた影響を考えれば当然とも言える。

(2)他方で、庶民レベルの交流については等閑視されてきてしまった。残存する公文書をはじめとする文字資料に依拠する限り、それも止むを得なかったかも知れない。

(3)しかしながら、わが国とドイツとの交流は、いわば歴史の教科書に掲載されているような頂点的な人物の間のみで行われてきたわけではない。日独の庶民の間にも多様な交流が展開されており、それは、とくに、絵画や写真、映像などの画像資料に着目した時、如実に我々の眼前に鮮やかによみがえってくるのである。

(4)本課題の背景には、庶民レベルでの文化的な日独交流の諸相を解明すべきと言う背景と、画像資料の歴史学への本格的な導入と言う背景が存在した。

2. 研究の目的

(1)本課題では、従来文書史料や記録史料をもとに叙述されてきた歴史の在り方を見直し、代表的な画像資料である写真を、歴史を伝えるメディア、すなわち「歴史写真」として捉え、写真を歴史史料として活用するための方法論の確立を目的とした。

(2)それとともに、近年、「歴史写真」の発掘が進む日本とドイツ連邦共和国の両国において、さらに「歴史写真」の調査を進め、幕末・維新时期(1860~1870年代)、大日本帝国憲法制定期(1880~1890年代)そして、日独防共協定締結期(1910~1930年代)の三期にとくに注目して、それぞれの時期の両国関係に関わった人物たちの「歴史写真」をもとに当該期の人的ネットワークの在り様を、とくに政治的側面と文化的側面と焦点を当てて解明することにより、日独関係の歴史を再構築することを目的とした。

3. 研究の方法

本課題では、上記のように、大別すると、歴史写真の利用と、それに基づく史実の解明というふたつの課題に取り組んだ。それぞれの課題をさらに(1)歴史写真というメディアの利用方法について考える、(2)デジタルアーカイブの理論と方法を実践する、(3)日独関係の資料を調査する、(4)歴史写真に基づいて日独関係を再構築する、に細分化し、そ

れぞれについて、以下のような方法を採用した。

(1)歴史写真というメディアの利用方法について考える

歴史写真集などをのぞけば、歴史叙述は、文字・文章による記述が中心で、写真は文字による叙述を助ける挿絵の一部としての位置付けに終始することが多い。しかし、「百聞は一見に如かず」の諺が示すように、写真から得られる情報は決して少なくない。そこで、写真を中心とする歴史叙述の考え方や方法について検討した。歴史写真を用いる際の困難は、その写真の被写体、撮影日時、場所などの特定が難しいことにある。そこで、本課題では、

写真の伝来などの周辺状況を収集して、そこから写真のプロファイリングを行う。

写真の技法や台紙など、写真そのものの情報から写真のプロファイリングを行う。

写真の正確なプロファイリングが不可能な場合の利用方法を開発する。

などの方法を定式化するとともに、日独関係の歴史を示す歴史写真の具体的事例に適用して史実の解明を行った。なお、歴史写真のたんなる利用法だけでなく、そもそも日本やドイツにおいてどのように写真技術の移入と伝播、写真に対する人々の意識の解明にも取り組んだ。とくに「写真の開祖」と言われる長崎の上野彦馬(1838 - 1904)が海外に開設した写真館(香港・上海・ウラジオストク)における活動を追究した。

(2)デジタルアーカイブの理論と方法を実践する

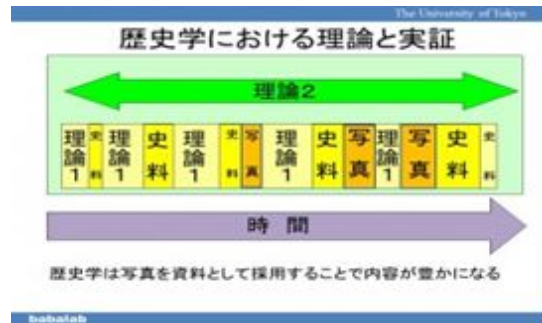
研究資料のデジタル化はすでに一般化した方法である。以前は、銀塩フィルムで撮影したものをスキャンしていたが、現在では銀塩フィルムの解像度に迫る高機能デジタルカメラが登場した。デジタルデータは加工しやすいという利点があるが、他方で改ざんもしやすいという点に注意を要する。また、何千枚、何万枚という写真のデジタルデータを保存する方法も重要である。DVDに格納すれば携帯に便利であるが、検索には向いていない。そこで、デジタルデータに対してダブリン・コア(Dublin Core)を拡張したメタデータ・エレメントセットを開発した。そして、画像データベースを構築し、例えば出張先からでもインターネットを通じてアクセスすることを可能にした。デジタルアーカイブは、使用上のメリットとデメリットを比較し、目的に応じた規格と仕様の制定が必要であり、本課題では、その理論化を行った。

(3)日独関係の資料を調査する

平成 25 年（2013 年）に日本とドイツ（当時はプロイセン）は交流 150 周年を迎えた。それを記念して展示会を初めとして、さまざまな催しが行われ、記念の出版も行われた。しかし、150 年の歴史は決して平坦ではなかった。日本の近代化は、大日本帝国憲法がプロイセンの憲法を手本として制定されたことに象徴されている。また、医学をはじめ多様な分野の学問がドイツから日本に移入されて、大きな役割を果たした。第一次世界大戦では互いに敵国となったが、昭和 11 年（1936 年）には日独防共協定が締結されて、日本はヒトラーのドイツ帝国と枢軸国を形成し、第二次世界大戦に突入した。戦後、ドイツは東西に分裂され、西側諸国に所属した日本は東ドイツ（旧ドイツ民主共和国）との関係を断つ。ともに敗戦国となった日本とドイツは、異なる方法で大戦の責任を反省し、戦後、著しい経済発展を遂げるにいたる。それでは、このような政治・経済の激動の時期に、日本とドイツの庶民はどのように交流していたのだろうか。政治的あるいは経済的両国関係の歴史は、戦前戦後を通じて人類の歴史に残る。しかし、庶民同士の交流は忘れ去られてしまう。そこで、庶民の観点から、日独の交流を跡付ける資料の発掘と記録を行った。

(4)歴史写真に基づいて日独関係を再構築する

「百聞は一見に如かず」というように、画像や映像はときとして文字による文や文章よりも多くのリアルな情報を伝えることが可能である。しかしながら、一部の写真集等を除いて、歴史叙述において、記述の中心は文章にあり、写真は挿絵程度にしか扱われていない。ところが、連続して記述されている文章の根拠となっているすべての文字資料は連続的に存在しているわけではない。歴史資料は古い時代ほど断片的で、新しい時代になっても連続することは多くない。その間断を埋めるのが、理論であり、傍証資料である。同様の考え方で写真を連続して、あるいは断片的に使用して、写真を主資料とした歴史叙述に挑戦した。歴史の理論にはふたつの役割があり、ひとつは史料と史料の断片を埋める役割、そしてもうひとつが歴史を俯瞰してみる理論の役割である。歴史写真を資料として採用することで、歴史学の内容を豊かにすることができるのである（右上図参照）。



4. 研究成果

本課題の研究成果を、平成 25 年度から 27 年度までの 3 年間の年次ごとに要約する。

(1)平成 25 年度の研究成果

本課題は、平成 25 年度（2013 年度）10 月に採択されたので、まず、研究代表者と分担研究者との間で、当該年度に行う課題を調整して、本課題の最終的な達成目標を変えずに、初年度に当たる平成 25 年度の当初計画を見直した。その結果、当該年度は、事前準備に基づいて、課題を絞り込んで確実な成果が見込まれる課題に取り組むこととした。しかしながら、研究期間を延長する（繰り越す）ことによって、最終的には、当初計画していた初年度の課題を遂行した。

ボン大学（ドイツ）が所蔵するフリードリヒ・トラウトツ（Friedrich Trautz, 1877 - 1952）のコレクションの調査を中心に、幕末・維新期の日独（プロイセン時代を含む）の交流を示す写真資料の整理、複写に取り組んだ。なかでも、トラウトツが明治初年のプロイセン公使アイゼンデッヒャーから譲り受けたと言われる資料に関しては、すべての調査を完了して、目録を作成した。



写真 左
フリードリヒ・トラウトツ肖像
写真 下
トラウトツ旧宅
（カールスルーエ）



フリードリヒ・トラウツ略歴

- 1877 南ドイツのカールスルーエで誕生
- 1909～1910 ドイツ軍の士官を休職し、世界旅行をする
- 1921 ベルリンで日本学の博士号を初めて取得
- 1921～1926 ベルリン民俗学博物館の研究助手
- 1926～1930 ベルリン日本研究所所長
- 1927 ベルリンで日本学教授資格を取得
- 1930～1938 京都日独研究所、ドイツ側所長
- 1936 ドイツ博愛記念碑 70 周年記念式典のため沖縄訪問
- 1938 ドイツに帰国、日本研究を続ける
- 1952 没

レーブレヒト・グラウ (Lebrecht Grau, 1906-1992) が撮影した写真の整理を行い、日記・手記・書簡などの文献資料と照合してプロファイリングを行い、目録を作成した。さらに、それらの日本語仮訳を完成させ、校正作業に着手した。



写真 左
レーブレヒト・グラウ肖像
写真 下
グラウ旧居
(現東京都大井町)



レーブレヒト・グラウ略歴

- 1906 4月15日ノルトライン・ヴェストファーレン州の現レムシャイドで誕生
- 1922 レムシャイドの商社で商業職業訓練始める(3年間)
- 1925 ハンブルクの貿易商社クリンゲルンベルク社に入社
- 1926 日本駐在を命じられ、5月14日に汽車にてハンブルクを出発
5月30日に大阪に着く、以後3年間日本に滞在、各地を旅行する
- 1928 ドイツに帰国、商社の日本部門の主任になる
- 1937 クリンゲルンベルクの単独代理権を

取得する

- 1939 ラインラントの貨物列車工場に転職、徴兵を免除される
- 1954 ルール地帯の大手機械工場に転職、のちに工場長となる
- 1957 日本・韓国ソウル訪問
- 1962 日本訪問
- 1968 日本訪問
- 1992 8月22日没、享年86歳

のちに日独外交において重要な役割を担う人々の多くが留学した米国ラットガース大学図書館が所蔵するグリフィス・コレクション(Griffis Collection)の整理を行った。その成果の一部として、国際交流センター小村記念館(宮崎県日南市、写真はその建物)の常設展示に小村寿太郎の写真を提供して協力した。



日本写真史の黎明期におけるキーパソンである上野彦馬(1838-1904)が経営した写真局の海外支店(上海・香港・ウラジオストック)に関する文献調査を行った。その過程で、従来知られていなかった上海支店において撮影された写真を新たに発見した。以上の作業を通じて、初年度の当初計画である幕末・維新期の日独(プロイセン)の交流を解明するとともに、収集した写真資料等の電子データのアーカイブ構築について検討し、かつ、次年度以降の研究の基礎的資料(複写写真と文献資料)を整備した。

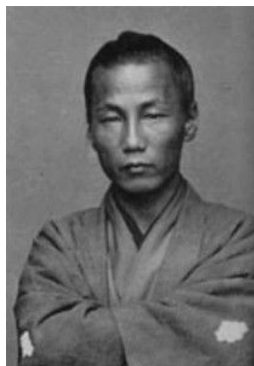


写真 上
上野彦馬肖像
写真 次頁
上野写真館香港支店



上野彦馬略歴

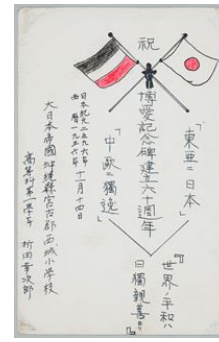
- 1838 8月27日上野俊之丞の四男として長崎にて誕生
- 1841 父俊之丞、オランダよりダゲレオタイプ輸入
- 1853 広瀬淡窓（1782-1856）の日田・咸宜園に入門
- 1858 ポンペに化学を学ぶ
- 1859 フランス人ロッシュについて写真術を学ぶ
- 1861 オランダ人ボードウィンを通じ、フランスの写真機を購入
- 1862 長崎の中島川の畔に撮影局を開設
- 1890 ロシア、ウラジオストックに支店開設
- 1891 中国、上海支店・香港支店を開設
- 1904 5月22日没、享年66歳、原因は胆管閉塞及び胆嚢水腫瘍

(2)平成26年度の研究成果

平成26年度（2014年度）は、とくに大日本帝国憲法制定期に焦点を当てて、前年度に引き続き、写真資料収集、収集資料の整理・分類・分析、を進めるとともに、新たに、収集資料の編集とデジタルアーカイブ化、研究会の開催を行った。

写真資料の収集に関しては、前年度同様、ボン大学の研究協力者とともに、同大学が所蔵するフリードリヒ・トラウツの画像史料の調査を行い、可能な資料は現地で撮影し、現地での撮影が不可能な資料は借用して、日本国内で撮影を行った。また、研究代表者と研究分担者が分担して、ベルリン、ハンブルク、バンベルク、コブレンツなどドイツ国内の公文書館における調査も推進した。その結果、ドイツ国内に所在する資料約3,900点の写真を収集した。また、国内（京都・東京・大阪・仙台・高野山など）においても調査を進め、約2,300点の写真を収集した。

収集資料は、写真の撮影日時・場所・被写体・撮影者などを同定して、写真資料にタイトルをつけて整理した。また、写真資料ではないが、1836年に沖縄の子ども達がドイツの子ども達に当てて書いた友好の絵葉書（642枚）をトラウツ・コレクションの中から新たに発見したので、これらの整理とデジタル化を行った。



トラウツ資料（友好絵葉書）



トラウツ資料（写真）

写真資料の編集とデジタルアーカイブ化を行った。写真資料の編集は、レーブレヒト・グラウの写真集の編集（原稿校正）を完了した。また、デジタル化し、メタデータが付与されたデータを、順次サーバに格納した。そのバックアップとしてDVDにも同様のデータを格納した。



グラウ資料（写真）



グラウ資料（文書）

全5回の研究会を開催した。

(3)平成27年度の研究成果

平成27年度（2015年度）は、本課題の最終年度に当たったので、次の3課題について重点的に実施した。本課題において、従来調査で漏れがあった歴史写真の補足調査、昨年度までと本年度において収集した歴史写真の整理、そして、本課題の研究成果の公開と発表、である。

歴史写真の補足調査に関しては、前年度までの調査結果を振り返り、国内においては東京都内、京都市内に所在する歴史写真ならびに関連資料、海外においてはボン大学日本・韓国学専攻所蔵のトラウツ・アーカイブに含まれる歴史写真ならびに関連資料の調査を行った。とくにボン大学の調査においては、靖国神社遊就館（東京都）が所蔵するドイツ・ウルム市製造の大砲のレプリカをフリードリヒ・トラウツが寄贈するに至った経緯を示す資料（写真ならびに文書）の調査を重点的に行い、同時に、靖国神社遊就館における調査結果との照合を行った。



トラウツ・アーカイブの整理状況
(ボン大学)

歴史写真ならびに関連資料の整理に関しては、すべての撮影データに対してメタデータを付与し、データベースに格納する準備を行った。平成 27 年度に新たにメタデータを付与したデータは、5,346 点にのぼる。なお、これらのデータを格納、公開するためのデータベースを準備し、順次格納した。

研究成果の公開に関しては、平成 27 年 7 月 7 日から 9 月 6 日に開催された国立歴史民俗博物館（佐倉市）の企画展「ドイツと日本を結ぶもの—日独修好 150 年の歴史—」に協力し、ボン大学から借用中であった原本と本課題において集積したデータ、ならびに本課題によって得られた知見を提供した（ボン大学からは貸出許可を取得した）。また、平成 27 年 12 月 9 日には、ボン大学において研究交流シンポジウムを開催し、とくにトラウツ・アーカイブの調査結果に基づいて研究発表を行った。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕(計 2 件)

馬場章、トラウツ・アーカイブにおける歴史写真（邦題）、東京大学・ボン大学研究交流集会「日独におけるメディア・コンテンツの状況」（邦訳）2015 年 12 月 7 日、ボン大学、ボン（ドイツ）

馬場章、日独共同による日本研究—ふたつ

のプロジェクトを通じて—（邦題）、国際シンポジウム「韓国・ドイツ・日本における日本研究の諸断面」（邦訳）2014 年 6 月 27 日、ボン大学、ボン（ドイツ）

〔図書〕(計 1 件)

吉見俊哉 他、ポット出版、アーカイブ立国宣言—日本の文化資源を活かすために必要なこと 2014、271

〔その他〕

ホームページ

http://chi.iii.u-tokyo.ac.jp/?page_id=4351

http://chi.iii.u-tokyo.ac.jp/?page_id=4389

6. 研究組織

(1) 研究代表者

馬場 章 (BABA, Akira)

東京大学・大学院情報学環・教授

研究者番号：10208704

(2) 研究分担者

吉見 俊哉 (YOSHIMI, Shunya)

東京大学・大学院情報学環・教授

研究者番号：40201040

佐藤 健二 (SATOU, Kenji)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：50162425

五百旗頭 薫 (IOKIBE, Kaoru)

東京大学・大学院法学政治学研究所・教授

研究者番号：40282537

北田 暁大 (KITADA, Akihiro)

東京大学・大学院情報学環・教授

研究者番号：10313066

研谷 紀夫 (TOGIYA, Norio)

関西大学・総合情報学部・准教授

研究者番号：00466830

（平成 26 年度まで研究分担者）

添野 勉 (SOENO, Tsutomu)

国立民族学博物館・文化資源研究センター・外来研究員

研究者番号：20436512

（平成 26 年度まで研究分担者）

(3) 連携研究者

該当無し